

しあわせの民俗誌・序説

—地方学から内郷村調査まで—

関 一 敏

はじめに

1 民俗調査のはじまり——それはどのような事
態なのか？

2 調査以前——民俗学の構想はなにをモデルにし
たのか？
おわりに

論文要旨

柳田國男が旅のかたちでなくムラの民俗調査に深くかかわったのは、郷土会による内郷村調査(1918.8)といわゆる山村調査(1934-36)に始まる共同調査の二回の機会だけであった。この稿では、このうち内郷村調査をとりあげて、わずか10日間の滞在が柳田に与えた経験の質を問うところから出発している。柳田が失敗と考えたのは、調査の指導方針のなさ、非文字資料の活用法のあいまいさ、さらには調査する者とムラの人々との距離の大きさ、といった民俗調査の本質にかかわるものである。それはムラで何をどう知ろうとするかという問いに等しい。およそ20年後の山村調査は、いわばこれらの失敗を克服する、より組織的なころみであった。

1910-20年頃の一所集中型の調査のはじまりが近代欧米人類学のパラダイムをつくり、近年の実験的民族誌にいたる多くの記述的作品を生んできたのにたいし、ほぼ同じ時期に内郷村調査をころみた柳田はこの道をとらなかった。そこで、集中型調査をあきらめる以前の柳田が、農政学から「農村生活誌」への願いを強めていく過程が問題になる。それは、のちに民俗学とよばれる「新しい学問」構想が何をモデルにして生まれてきたかの問いでもある。郷土会での新渡戸稲造の地方学、牧口常三郎の郷土科研究との接触、南方熊楠との膨大な書簡の往復と論争をへて、柳田は郷土という足元から世界をみる方法を獲得し、と同時に「共同研究機関としての雑誌」というすぐれて近代的な基盤にたった研究運動体の可能性を模索しはじめる。つまり、内から外へと向かうきわめて身体的な視線と、それを外からみようとする鳥瞰的な視線の併存状態である。

柳田は、しかしながらこのふたつの視線の併存をついに方法的に克服することなく、貧困の問題と魂の問題を鳥瞰的にとらえる後者の道を選んだ。前者の視点から「しあわせの民俗誌」に結実する可能性を探ることが、本稿の目的課題であった。